

事業完了報告

宮山神社の八王社は、元来は布田村の同覚寺坂の上にありましたが、享保14年(1729)、一説では享保6年(1721)頃の大雨による大規模地滑りが発端となり、享保20年(1735)に現在の地に再建されたと伝わっています。遷宮以前よりこの地にあった雨宮神社と併せて祀られるようになり、現在は宮山神社と総称されています。

創建年代が明確な八王社本殿の細部の意匠は、比較的単純明快な中に手挟みなどには箆彫の技法がみられるなど、先進的な近世社寺の特徴が垣間見え、県内の神社建築の発展過程を知る上で貴重であるとして、平成31年1月に村の有形文化財として指定されました。

また、当時馬場としても活用された杉並木の長い参道や、江戸期の石碑や灯籠、イチイガシの神木に代表される照葉樹の大木群に囲まれた境内は、江戸期の神社構成と歴史を今に伝えており、建物と共に貴重な遺産と言われています。

平成28年(2016)4月に発生した熊本地震において、拝殿・幣殿は倒壊し、辛うじて倒壊を免れた本殿や雨宮も、柱の折損や基礎の倒壊がみられるなど甚大な被害を受けました。本事業では震災復旧はもとより、文化財的な価値を損なわない修理方針で、地域コミュニティで中心的な役割を果たす「活きた神社」としての復興を目指して事業を進めました。

本事業に際し、村の補助金や氏子の方々の寄付等、村内外より多大なるご支援を頂きました。これらのご支援について、心から深く感謝致します。

本稿では本事業の概要と経過、また調査で明らかになった約280年間の私たち先祖の歩みの一端をご紹介します。

令和3年5月吉日 宮山神社再建委員会

- 事業名称：「令和元年度 西原村指定有形文化財 宮山神社修復事業」
- 修理方針： 八王社本殿・拝殿・幣殿・・・・・・・・・・解体修理
雨宮神社・・・・・・・・・・部分修理
- 事業期間： 令和元年8月1日～令和3年3月15日(1年8ヶ月)
- 収支内訳：

・総事業費	74,760,000円
・支出内訳	
本体工事	60,907,000円
周辺整備工事	7,399,700円
その他工事・事業	6,453,300円
・収入内訳	
西原村補助額	48,725,000円
県補助額(復興基金)他	9,536,000円
寄付金	16,499,000円

工 事 関 係 者 名 簿

事業主	代表役員	緒方 宏信				
再建委員会	委員長	内田 敏則				
	副委員長	中村 辰則	緒方 登志一			
	事務局・会計	内田 安弘				
	委員(布田)		緒方 弘昭	今村 勝信	上野 正博	
			首藤 和広	加藤 憲悟	堀田 正彦	
		(宮山)		秋 吉隆	米田 政輝	川元 博美
			東 義秋	林田 直行	小城 保弘	
西原村教育委員会	顧問	嘉戸 愉歩				
	顧問	小谷 桂太郎				
設計監理	株式会社文化財保存計画協会					
	代表監督	矢野 和之				
	工事主任	佐藤 信芳				
	現場担当	武田 学				
工事請負 (本体)	株式会社藤本和想建築					
	代表	藤本 誠一				
	本殿棟梁	藤井 利成				
	拝殿棟梁	川口 和寿				
	大工		影山 裕也	廣岡 彪雅	岩根 寛弥	原田 勝 田島 茂彦
			荒木 伸太郎	松永 孝一	脇 大志	徳永 功一 坂本 伸一
			河西 隆	東 和敏	松本 一晃	磯口 大輔 中村 圭(補)
		設計協力	高尾 実佐			
	協力業者	基礎工事	藤川工業	井野工業		
		仮設工事	株式会社関工業			
木材納入		有限会社清水木材	河津製材所	有限会社杉岡製材所		
石工事		松下産業株式会社				
板金工事		有限会社井手板金建装社				
瓦工事		有限会社東瓦工業				
曳家工事		合資会社高口組				
彫刻修復		小西彫芸	木彫前川	森田漆		
建具工事		原田木工所	有限会社谷口木工所			
左官工事		坂本工業				
畳工事		荒木畳店				
電気工事		有限会社福田防災工業	大恵電気工事			
玉垣復旧		千葉平五郎石材				
金物製作		合同会社光陽社				
金物納入		小栗商店	室金物			
工事請負 (周辺整備他)		防災・防犯	有限会社福田防災工業			
	空殿修復	寺本工芸工務店				
	絵馬修復	崇城大学芸術学部中村研究室				
	扁額彩色	日本画工房浮島館				
	鳥居再建	株式会社橋口石彫工業				
	石段・舗装・外構	株式会社藤川建設	パティオ企創造園部			
	災害ボランティア	天理教有志一同代表	観巻 裕二郎 観巻 五郎			

宮山神社被災概要

○はじめに

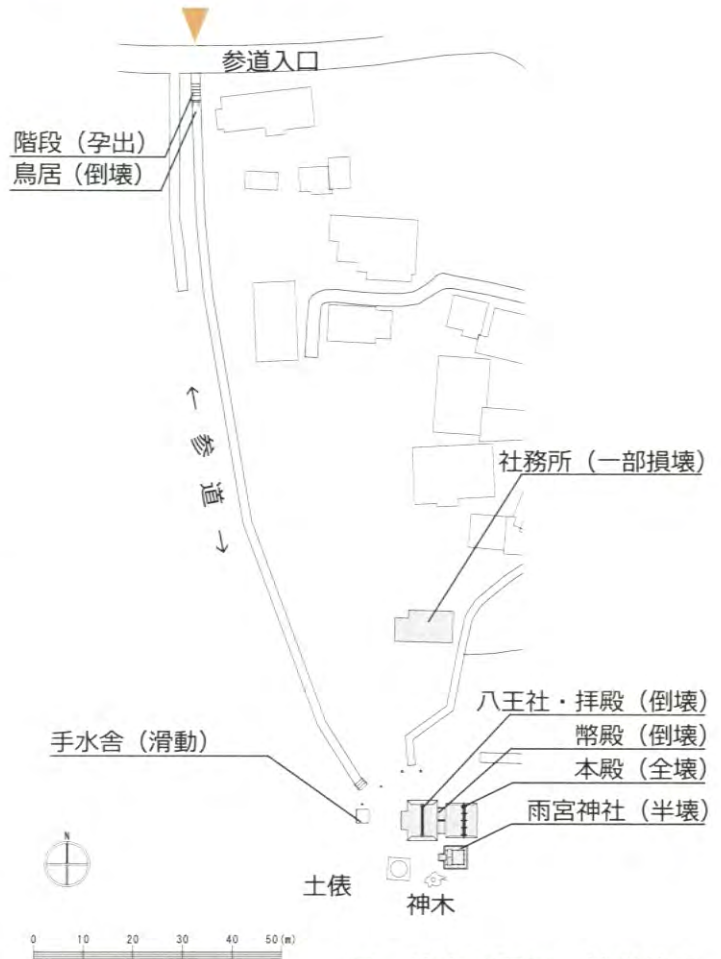
平成28年4月14日にM6.5、同月16日にM7.3と、28時間以内に2度の大きな揺れを観測した熊本地震は、震源となった布田川断層が走る西原村にも甚大な被害を与えました。宮山神社境内における構成物の多くも被害を受けましたが、発災から3年半後の令和元年8月より修復事業を立ち上げ、2年弱の歳月をかけ、令和3年の春に無事に竣工を迎えることが出来ました。本稿では、宮山神社の被害状況から、事業完了までの工程や修理の内容、部材の調査や保管されていた札類の史料調査によって明らかになった事柄などを紹介したいと思います。

○被災状況と修理概要

・八王社 本殿（享保20年[1735]建）

倒壊を免れたものの、主要な柱の折損や向拝部分の倒壊、小屋組の転倒、基礎石の倒壊や基壇の孕み出しがみられ、全解体修理としました。

復旧に際しては、基礎工事として基壇の一体性を確保するための布基礎や、基礎石補強の地中梁を基壇内に配しました。軸組は折損した柱の取替や根継、腐朽した部材の取替、楔や込栓等の増し締めなどを行い、在来の工法に倣い復旧しました。小屋組は昭和27年に銅板葺きに改められた際に多くの部材が補足されていましたが、桔木等が有効に機能していなかったため、受け梁や桔木受等を付加し、屋根荷重を分散させるなどの、構造補強を行いました。外観に関わる意匠・形状等は昭和の改変時に倣い補足材であっても極力再使用し復旧しました。



図：境内配置図 被災状況



【八王社本殿・幣殿】被災前の様子 小谷桂太郎氏提供



【八王社本殿・幣殿】被災直後 北面



【本殿】倒壊した基礎石と滑動した躯体



【本殿】折損した隅柱



【本殿】軸組から脱落した屋根組

・八王社 拝殿（享保20年？）

幣殿（大正11年[1922]建）

本震により完全に倒壊した影響で、部材の損傷が大きく、多くの部材を取り替えざるを得ませんでした。復旧に際しては、不動沈下の顕著な基礎部にはベタ基礎を施し、礎石を一体的に拘束しました。軸部は本殿同様、損傷の見られる部材の取替と根継・修繕等を行いながら、壁の補強・床構面や屋根構面への構造補強を行いました。小屋組は平成22年の屋根替え時に取り替えられた部材が構造的に機能していなかったため、補足部材により小屋組の構成を改めました。また、元々水平梁が無いことや、隅木を丑梁で吊って支える特殊な構造では瓦屋根に対する構造耐力を担保できないと判断し、銅板屋根に改め屋根の軽量化を計りました。



【拝殿】被災直後の様子

・雨宮神社（明治21年[1888]建）

倒壊は免れましたが、向拝の倒壊、身舎の基礎石からの脱落による土台の折損などが確認されました。復旧に際しては、破損した部材の修繕・取替はもとより、揚屋工事で高さや捻じれの補正を行い、元の場所に据え戻しました。



【雨宮】被災直後の様子

・その他の構成物

玉垣の倒壊、鳥居の倒壊、手水舎は跳ね上がり基礎石から脱落、灯籠・狛犬の倒壊、石段の孕み出しなど境内の構成要素の多くに被害が及びましたが、総ての復旧を完了しました。



【鳥居】被災直後の様子

工程 1. 解体工事 令和元年11月～

発災から工事着工まで約3年半、仮補強で踏ん張っていた本殿の分解工事に着手しました。小さな板の一枚に至るまで、部材名称と番号を振り分け、部材を傷つけないように丁寧に解いていきます。3間社という小規模な本殿ですが、部材総数は大小含め約1,900点、材積約13m³にも及びました。解体は上部躯体とともに、位置ズレや転倒をおこした基礎の石や基壇の葛石とその地盤まで行いました。



① 解体前の本殿正面。屋根が躯体から外れ、北側に大きくズレていました。



② 小屋組の解体完了。



④ 跳ね上がった屋根が正規の位置から北西に約40cmほどズレていました。



③ 垂木や野地板の解体状況。著しい漏水は見られず、比較的健全な状態を保っていました。



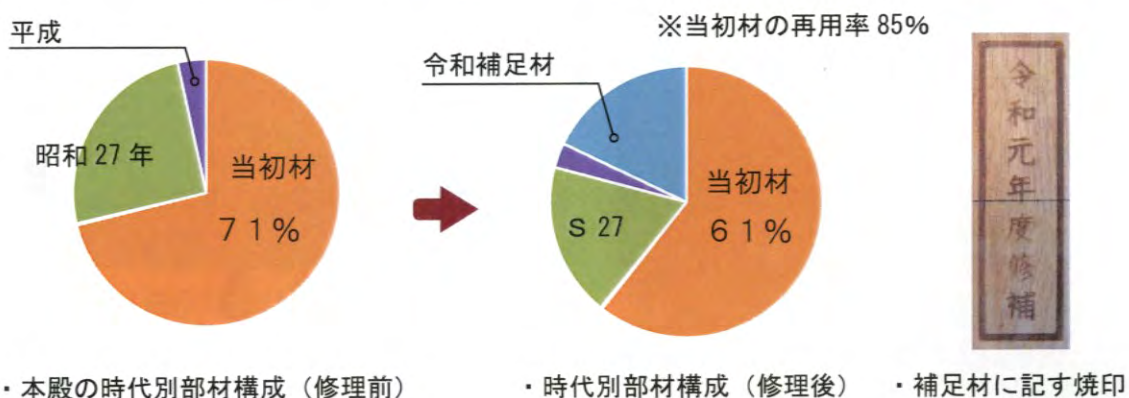
⑤ 床板や床組の解体状況。中央部に小火の痕がありました。幾多の苦難を乗り越えてきたようです。



⑥ 基礎石まで解体を完了した状況

工程2。部材の繕い 令和2年1月～

解体した部材は可能な限り再使用することを目指し、丁寧な修繕を行います。構造的な強度を担保するため材の交換箇所も慎重に吟味しました。また、材の詳細な実測を行い、原寸図を作成し、建立当初の計画寸法を考察します。下のグラフは本殿を構成する部材を時代ごとに整理したものです。本工事で当初材は約8割再使用できましたが、修理後は全体の6割程度になりました。修理ではモノを失う側面もあることを謙虚に受け止め、慎重に手段を選びます。また、取替部材については当初材と同種材を用い、当初と同様の加工を施しました。材料は取り替えても旧状を再現し、後世にその情報を伝えることを心がけました。同時にそれは技術の継承に繋がっていく点においても、修理現場の大事な役割の一つと考えています。



① 部材実測により小屋組の寸法体系を整理。屋根の弛み曲線を調整しました。



② 柱の根継の仕口。強度上問題がない箇所で見え掛りに配慮し目地を包み込む形状としました。



③ 板の割れや小さな欠けも丁寧に修繕しました。



④ 表面劣化が進行したクスの彫刻部材に膠を含浸させました。

工程3. 組立・仕上 令和2年6月～

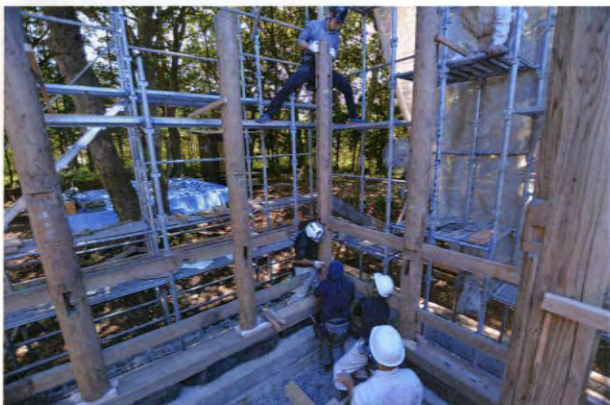
繕いを終えた部材を現場で組上げていく工程です。基礎は緩み易く不安定であった基壇を籠のように取り囲む布基礎で補強し、地盤の安定化を図りました。その中に設けた地中梁の上に元の基礎石を据え戻しました。石の凹凸に合わせて土台の下面を削り合わせたら、いよいよ柱を建て込みます。横貫が交錯するので建てる順序を間違えるとうまく組み上げることが出来ません。また、組立ながら板を落とし込むので細かい調整を要します。もともと組み上がっていたものですが、木の歪みや反りを巧く見極めないと組み上がりません。再建には新築とはまた別の技術が求められます。



① 基礎工事を完了した基壇



② 土台の据え付けを完了



③ 柱を建て込む状況



④ 落とし込み板を嵌め込む状況



⑤ 向拝を組上げる状況。手挟みは桁の木口から差し込むつくりになっていました。



⑥ 組み上がった向拝の斗拱。発災時に倒壊した部分ですが、総ての材を再使用出来ました。

工程4. 組立 令和2年9月～

軸部が組み上がると、屋根を組立てる工程に移りました。切妻の片流造という比較的社寺建築では単純な作りですが、経年変化で捻じれた部材を計画通りに組上げるには、繊細な調整が必要になります。原寸より起こした定規や水糸で計画寸法との誤差を見定めながら作業を進めていきました。基本は現状復旧ですが、小屋組の桔木が有効に機能しない構造になっていたのを、受梁や母屋などの補強材を付加し屋根荷重が軒先に集中しない構造に改善しました。



① 本殿正面、地垂木や破風の取付を完了



② 打越垂木とその化粧野地、軒先部材の取付け



③ 補強材と桔木、垂木の取付完了



④ 荒野地の施工完了

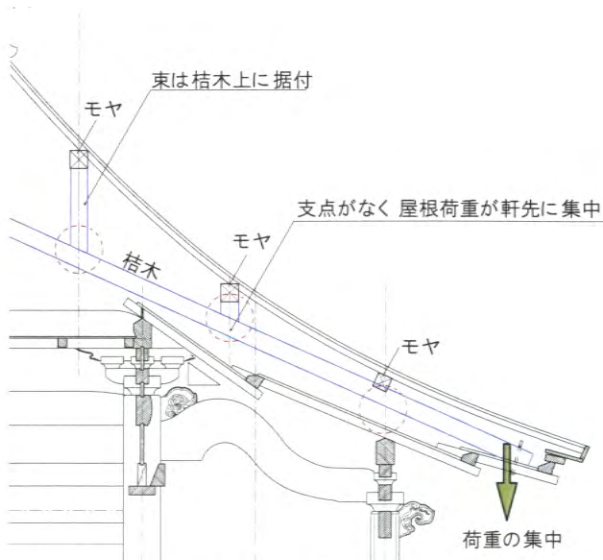


図1：軒先断面図 修理前

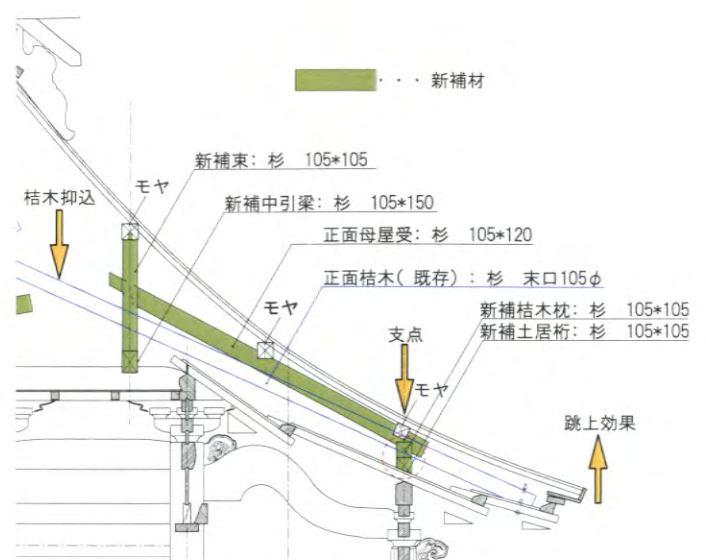


図2：軒先断面図 修理後



⑤ 本殿内部の床の復旧



⑥ 本殿内部床復旧完了



⑦ 彫刻部材の新規作成



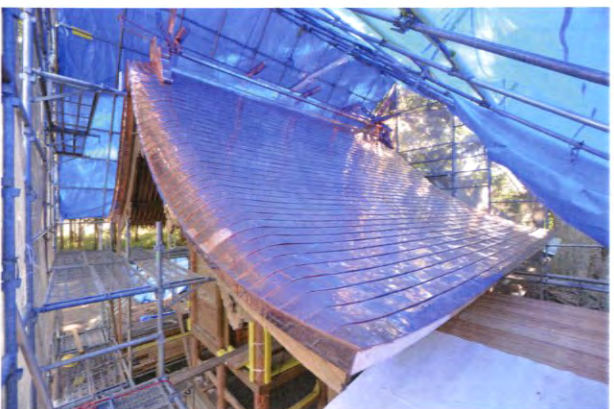
⑧ 懸魚繕い箇所の方針協議



⑨ 懸魚の取付け。六葉と共に当初材を再使用した



⑩ 銅板葺き施工状況



⑪ 屋根銅板葺き施工完了

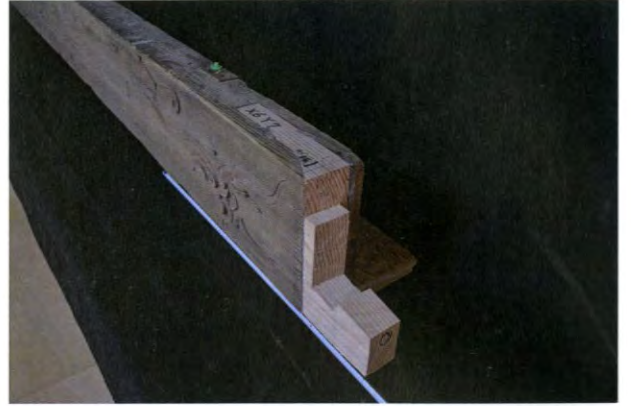


⑫ 足場・素屋根の解体

工程 5 . 拝殿の組立



① 原寸検査



② 折れた仕口の補修状況



③ 軸組の組立工事 壁板と同時に建込



④ 軸部の組立状況 頭貫まで



⑤ 反り上がった桁の矯正



⑥ 屋根組施工状況 構造的一体性の確保



⑦ 屋根銅板の施工完了

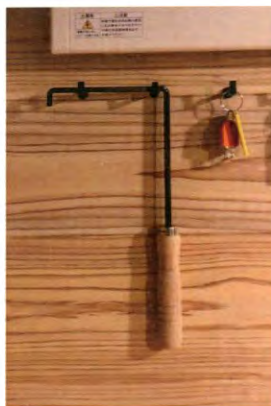


⑧ 耐震壁の付加

工程 6 . その他工事



① 雨宮神社の据え直し



② 本殿唐戸補修と錠の復原



③ 防犯灯・自火報設備の新設



④ 基壇天端の仕上：モルタル⇒土系舗装材



⑤ 玉垣の復旧



⑥ 拝殿扁額の補修と彩色



⑦ 大破した本殿の空殿



⑧ 空殿の補修と組立て

周辺整備（別事業）



① 鳥居の再建と石段の積み直し



② 倒壊した鳥居は、震災遺構として展示



③ 参道脇にスロープを整備



④ 境内に通じる石階段脇の石垣の積み直し



⑤ 古瓦を再利用して社殿周囲の雨落ちを整備



⑥ 本殿の賽銭箱を新調



⑦ 雨宮の賽銭箱を修繕



⑧ 3月23日午後9時より遷座祭を執り行う

竣工写真（施工前との比較）



①・② 本殿北面 竣工と施工前



③ 本殿北西隅 竣工



④ 本殿北西隅 施工前



⑤ 本殿内部 竣工



⑥ 本殿内部 施工前

竣工写真（着工前との比較）



⑦ 3棟北西隅 竣工



⑧ 拝殿西面 竣工



⑨ 拝殿西面 施工前



⑩ 拝殿北面 竣工



⑪ 拝殿室内 竣工

竣工写真（着工前との比較）



⑫ 幣殿南面 竣工



⑬ 幣殿室内 竣工



⑭ 雨宮神社西面 竣工



⑮ 雨宮神社西面 施工前



⑯ 本殿軸部詳細 竣工



⑰ 本殿向拝 小屋組 竣工



⑱ 本殿廻縁 擬宝珠付高欄柱 竣工



⑲ 本殿浜縁 竣工

○ 調査事項

■本殿の改変履歴① 屋根形状

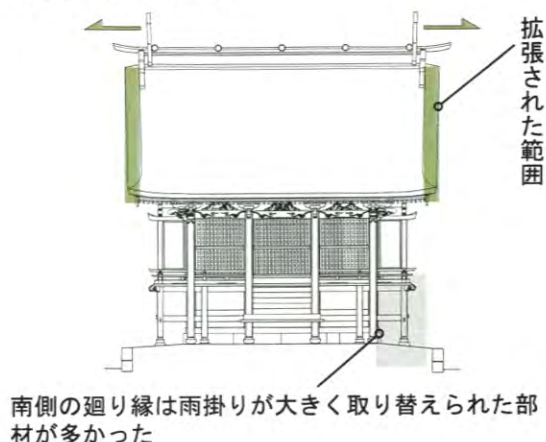
本殿が創建当初から大きく姿を変えた点は屋根の形状です。内部に保管されていた札により現在の屋根銅板は昭和27年に葺き替えられたことが判りました。その際に小屋組の部材の多くが銅板屋根用に組み替えられ、南北方向にそれぞれ垂木3本分の屋根の拡張がなされていました。その理由は定かではありませんが、銅板葺きに改めた屋根形状の見栄えを意識したものと考えられます。本事業ではもとの姿に復原することは行わず、昭和27年の姿に現状復旧する方針で修復を進めました。屋根から下の軸組についてはほぼ創建当初の姿を留めており、部材の状態も比較的健全で多くの部材が再使用出来ました。

写真1：本殿解体中の妻軒詳細



屋根改変時に付け足された桁 (転用材)

図1：本殿西面立面図



■本殿の改変履歴② 基壇の形状

本殿基壇の葛石は現状では延石の2段積になっていますが、当初は1段積であった可能性が高いことが判りました。上段の石材は昭和33年の刻印のある玉垣石と同様の仕上げが施されており、玉垣の石材と上段の葛石は同時期のものと推察できます (写真2)。

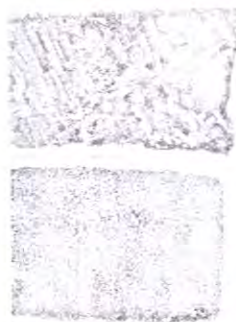


写真2：石材加工痕の差
上：当初 下：S33



写真3：赤味の強い凝灰岩

阿蘇火山博物館の渡辺先生によると、1段目の当初葛石は馬門石のように赤味が強い凝灰岩の一種で (写真3)、阿蘇-2 (B) に分類できますが、稀に見る岩相でここまで赤いものは珍しいとのこと。馬門石のように赤味の強い石は神聖視されてきた歴史があり、その靈性さにあやかってこの石材を使用したのかもしれない。また爪を立てると筋が入るほど軟らかく、加工性し良いのも特徴です。雨宮神社側の基壇も同種の石が使用されており、時代性を探る手掛かりになるかもしれません。

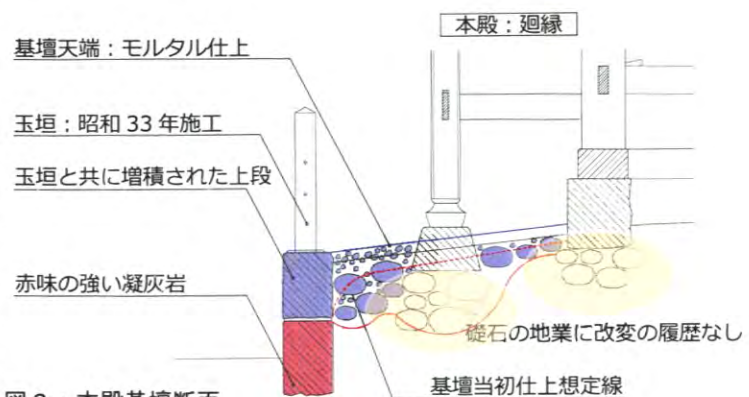


図2：本殿基壇断面

■創建時の屋根材は茅葺？

当初の屋根葺き材を直接示す痕跡は部材には確認されませんでした。ただ、昭和期に記された札の覚書に「当神社ハ古来ヨリ神殿ハ宮山 拝殿ハ布田ノ受持ニテ 屋根其他工事モ受前ヨリ...」とあり、定期的に屋根が葺替えられていた様子や、その作業が部落ごとに割り当てられていたことが判りました。また、昭和2年に雨宮神社（明治21年建築）の屋根の葺替えを記す札には、萱（かや）や薄（すすぎ）などを購入した記述があり、当時の雨宮社が茅葺であったことが判ります（写真4）。さらに、大正11年の本殿屋根の葺替えを記す札には、職人に「葺師」の名が綴られており（写真5）、その30年後の昭和27年に現状の銅板に改められたことを勘案すると、銅板以前の屋根が同じく茅葺であった可能性は十分に考えられます。外輪山というカヤ場がすぐそばにある環境と時代性を考えるとごく当然のことかもしれません。茅葺だった創建当初の印象は現在とは随分と違ったものであったと想いを巡らせます。因みに近世以前に建立された流造の神社は数多く現存しますが、国指定文化財でも茅葺の流造屋根が茅葺のまま現存する事例は非常に少なく、わずか数例しかありません。技術継承や資材確保の難しさにより、茅葺を諦めざるを得なかった時代背景があるものと考えられます。



「六十七銭萱不足買入」

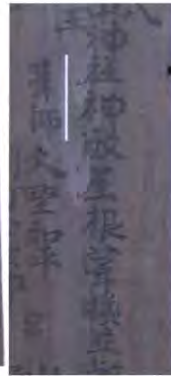


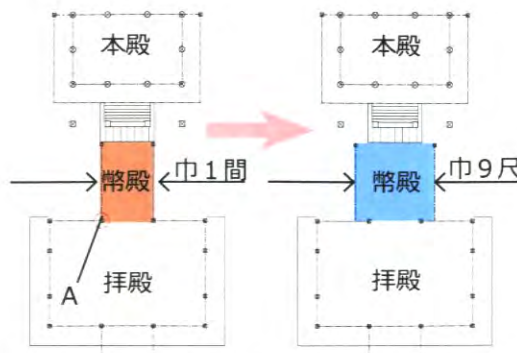
写真4：雨宮の屋根葺替とカヤ購入を示す覚書（S2年）

写真5：神殿の屋根葺替と葺師の名大正11年

写真6：山形県・水上八幡神社本殿（室町後期）
※文化庁国指定文化財等データベースより転載

■幣殿の改変履歴

札の一枚に大正11年に幣殿の建て替えを記したのがありました。「当宮山八王神社幣殿の儀ハ古来入り九尺幅尙間ニテ狭隘を告依て大正十一年三月十六日氏子中協議ノ上梁九尺桁九尺ニ抔シテ工事費...」とあり、儀式に於いて建物の幅が狭いため建増しを行いたい旨を簡易な図面と共に、当時の熊本県知事に申請した内容が記されています。創建当初の範囲を示す痕跡が拝殿や幣殿の柱にも残されており、壁はなく開放的で渡り廊下のような建物であったと推察できます。ただ、現状では平成の台風被害の際に拝殿・幣殿の屋根替えと同時に、幣殿の平面規模は梁間2間に再度拡張されており、当時の部材はほとんど残っていませんでした。



改造時痕跡…貫
※大正十一年以前に壁設ける



当初痕跡…桁（上）
当初痕跡…手摺（下）

写真7：幣殿立替え覚書（大正11年）

図3：幣殿の規模変遷当初(左)T11年立替時(右)

写真8：柱A本殿側に残る痕跡

■空殿の造営時期と大工の名

空殿は、厨子・宮殿などとも称される神様を安置するための小さな建屋です。震災直後は転倒し、屋根の組み物や壁板などが散乱するなど、大破した状態で見つかりました。修理においては散乱した部材を分類し、不足分や折れて使えないものを取り替えました。その修理過程で部材に残る墨書が見つかり、その造営時期や大工の名前が判明しました。

「天明七年ひのとひつし 川原村 大く 九平」（※天明7年は1781年「ひのとひつし」は六十干支の丁未）

また、各空殿の側面の壁板には寄進元として「奉寄進本村産子中」が2基（本村とは布田）、「奉寄進田気村産子中」が1基とあり、当時は益城郡に属する滝村や河原村との交流があったことが判ります。現在氏子集落ではない滝村の名がここに現れているのは非常に興味深いことです。



写真9：本殿内の3基の空殿



写真10：右殿側面墨書



写真11：左殿柱面墨書

■本殿再建時期を示す棟札

本殿内には八王社の再建時期を示す棟札が保管されていました。その札には享保20年の再建時期の年号と祈禱文言、当時の関係者の名などが記されています。一部目視では判読がつかなかった部分を赤外線撮影し、擦れて見えなくなった部分の文字を確認しました。

表面の中央部分の両脇には

「大梵天王（イ）、多門天（ロ）、聖主天中天、地国天王（持国天）、帝釈天王（ハ）、広目天王（ニ）」

とあり、仏教における四天王や天部の名が並べられています。裏面には「如意安全仏法不□師檀氏子繁昌願力如斯」（※下線部分が消された部分）とあり、仏教に関する部分のみが不自然に読めないことから、意図的に摺り落されたものと推察できます。

また、雨宮神社内に残る墨書には、雨宮神社内に祀られている十一面観音像（室町期）は八王社本殿に祀られていましたが、明治初期に村内のお堂に移され、大正11年に雨宮に戻ったことが記述されています。これらは明治初期の国策である廃仏毀釈の影響と考えられ、国策により当村における信仰の在り方が翻弄された歴史を今に伝えています。近隣神社も含めて今後の包括的な調査でさらに歴史が解明されることを期待します。



写真12・13・14：本殿棟札（表）

通常撮影した札（左）と赤外線撮影した札（中）。目視で判読できるのは年代や札の主旨を記した部分で詳細（右）で見るようにイ：大梵天王、ロ：多門天、ハ：帝釈天王、ニ：広目天王などの部分が不自然に擦れている。A部は判読が出来なかったが梵字が記されていた可能性があります。

■装飾材の記録

解体した装飾部材については実測と併せて個別の写真記録を行いました。各部材はどこか素朴で軟らかい印象もありますが、細部に渡って精細な仕事が行なわれており、社殿全体に引き締まった印象を与えています。この時代以降から、社殿は過剰とも言えるほどに装飾を追及する傾向が見られるようになりますが、本神社はその転換期に位置づけられ、熊本の近世社寺の発展過程を知る上においても貴重な事例と考えられています。



写真 15：本殿向拝正面獅子鼻



写真 16：本殿向拝頭貫上墓股 (中央) 麒麟

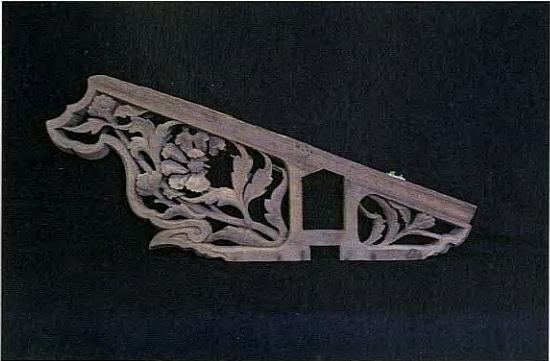


写真 17：本殿向拝手挟み



写真 18：本殿桁隠し

■最後に

水害により流失の危機に見舞われた八王社が現在の地に再建されるまでの間には、享保の大飢饉（享保 17 年）が起り、肥後藩における餓死者数が約 6 千人に上ったそうです。また、翌 18 年の大洪水では 36 万石の田畑が被害を受け、庶民の暮らしは尚一層厳しいものになっていきました。享保 20 年の八王社・宮山神社の再建には、生きていくことが困難な時代における人々の願いが込められていたと思います。そしてそれは棟札の「師檀氏子」にあるように、神・仏の垣根を超えた万人に向けられた願いであったと思います。この度の震災からの復興がその願い・想いの継承に繋がり、今を生きる地域の結束と活力になることを願って止みません。



写真 19：震災の翌年の神前相撲の様子



写真 20：託児所として活用されていた時代の写真
(昭和 30 年代) ※写真提供川元氏